

日蓮聖人佐渡流罪の法制史的考察

(一) 蒙古襲来について

中 里 悠 光

目 次

はじめに

一、元朝の成立

- 1、モンゴル族
- 2、ジンギス汗の登場
- 3、オゴタイ汗の高麗朝圧迫

二、元朝の日本遠征

- 1、日本遠征計画の発端
- 2、国書の内容
- 3、高麗国王の書
- 4、蒙古国書に対する幕府の態度
- 5、文永の役まで

むすび

- 6、蒙古襲来の予告
- 7、文永の役
- 8、日本遠征の中断
- 9、弘安の役
- 10、蒙古軍の敗退
- 11、蒙古軍の東南アジア侵攻
- 12、元朝の日本遠征失敗
- 13、文永の役、弘安の役の水路について
- 14、文永の役の航路
- 15、弘安の役の航路

はじめに

日蓮聖人は六十年に亘る生涯のうちに四つの大きな難に遭遇している。^①伊豆流罪。小松原法難。松葉谷焼打、佐渡流罪がそれである。なかでも伊豆流罪、佐渡流罪は文字どおり幕府が直接に手をくだした、所謂王難として特に注目すべきものであると考へる。

本稿ではそのうちの佐渡流罪に関連する項目として蒙古襲来という事件をとりあげた。蒙古襲来が日蓮聖人佐渡流罪とどのように関連するかということについては触れないが、とにかく蒙古襲来を佐渡流罪という大事に起点をおいて考へている点だけを記しておく。

この事件は日蓮聖人にとってはもちろんのこと、日本にとっていわば国家の存亡にかかわる大事件であった。本文においても述べるが、あの強大な勢力を誇る元朝を想う時、我が日本が元朝支配より免れたことは諸原因はあるが、ある面では極めて好運であったと言っても言い過ぎではないだろう。日蓮聖人にとっては別の意味で宗教体験の要因となっている。私はここで蒙古襲来を日蓮聖人佐渡御流罪の「遠因」として捉え、これを明らかにすることを目的とするものである。

一、元朝の成立

1、モンゴル族

あの広大な版図を誇ったモンゴル帝国もはじめは牧畜を生活の基盤とする遊牧民族で、ステップの民と称する小民族のひとつであった。中国大陸では古くから牧畜を主とする牧民社会と農耕を中心とした農耕社会が覇権争いを繰

り返していた。

こういった攻争のうちより発生したモンゴル部族は高原北部のオノン河畔をその拠点とする遊牧民族として、ようやく十一世紀頃よりその勢力に顕著なものを見せはじめ、次第にモンゴル高原の覇者として活躍し、その力は隣国である金国をもおびやかす存在にまで成長した。

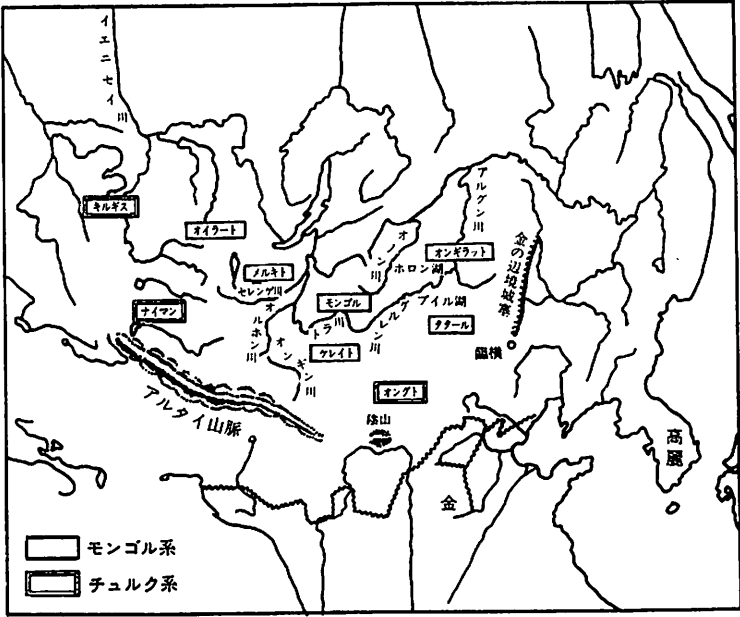
しかしながら勢力拡大政策も金国の巧な攻略によっては生まれ、勢力後退のやむなきに至り、本格的な勢力拡大は十二世紀半のジンギス汗の出現をまたなくてはならない。

日本の歴史に登場する蒙古、所謂蒙古襲来事件を考えると、私はこの事件をただ単に蒙古の日本侵略と看るのではなく、この事件の端緒を遠くテムジン・ジンギス汗に求めることによって初めてその真相を把握することができる、いなテムジン・ジンギス汗にまでさかのぼって考察することなしには蒙古襲来の本当の姿を捉えることはできないと言っても言い過ぎではないと思う。

2、ジンギス汗の登場

当時北方ではオンギラット、タタール、オングート、ケレイト、モンゴル、メルキト、オイラート、ナイマン、キルギスの諸部族が互にその覇を競い、折あらば北方アジア統一を為し遂げんと鎗を削っていた。

メルキト族討滅をはじめとしてタタール部族潰滅、ケレイト族滅亡、ナイマン族潰滅とジンギス汗は次第にその勢力を拡張しながら、ついにモンゴル高原をその手中に入れたのである。そして彼にとって最大の怨敵金国への挑戦はモンゴル族永年の宿願であり、モンゴル族の世界支配という大望を実現する第一歩でもあった。時あたかも金国の衛紹王が即位すると聞くや、ジンギス汗はこれを契機に職鬪の意思をかため金国に向った。一二一年のことであ



モンゴル系
 チュルク系

る。これは一二三四年の金国滅亡までの実に二十三年の永きに亘る戦闘の初めであった。しかしジンギス汗は戦い半にして歿し、モンゴル帝国は二代目オゴタイ汗がその遺志を継ぐこととなった。

モンゴル帝室系図 (キヤト・ボルジギン氏)
 (首都はカラコルム)

①チンギス汗(太祖)
 (一二〇六—一二二七)

ジュチ — バトウ汗(キプチャク汗国主)

チャガタイ(チャガタイ汗国主)

②オゴタイ汗(太宗)
 (オゴタイ汗国主)

③グユク汗(定宗)
 ハイドウ汗

④モンケ汗(憲宗)

⑤フビライ汗(世祖)

フラグ汗(イル汗国主)

アリク・ブケ

トウルイ

3、オゴタイ汗の高麗朝圧迫

金国を攻める一方、モンゴル帝国は帝国の名にふさわしく西に向ってもその攻撃の手を伸ばし、ホラズム国征伐の途にたち、また東に向っては南満洲、朝鮮半島が一三三四年金国滅亡後の攻撃目標となった。

モンゴル帝国の版図拡大意欲はとどまるところを知らず、アジア大陸の東から西にその殆んどを支配下に収めることとなった。ここにモンゴル大帝は五代フビライ汗が即位するにあたり一大飛躍を遂げるのである。これが一二六〇年に始まる元朝初代世祖であり、我が国に対し通好を迫り攻撃の挙に出た帝である。彼は一二一五年に生まれ、その生涯に外モンゴルから満洲・中国・チベット・ビルマさらにジャワ・スマトラにまで遠征を行ったとされている。

元朝成立の頃中国は南宋の時代であった。南宋は金国の圧迫、侵略をたびたび受け、金国滅亡の後には元朝の侵略にさらされることとなった。つまり、フビライ汗はアジア大陸統一の一環として南宋支配に着手し、一二七九年ついに一五〇年の永きに亘った宋朝政権を倒すことに成功した。元朝はまた南宋攻略と同時に一二三一年以来の高麗国の属国化を目指していた。そして一二六〇年高麗国が属国となるや、いよいよ朝鮮半島の東に浮かぶ日本列島がフビライ汗の征服計画の中に組み入れられることとなったのである。

二、元朝の日本遠征

1、日本遠征計画の発端

一二六六（文永三）年十一月二十五日、元朝の兵部侍郎黒的、礼部侍郎殷弘の二名がフビライ汗の使者として高麗国を訪れた。彼等は「いま爾の国人趙彝という者が告げるところでは、爾の隣国日本は文化も政治も見るべきものが

あるということである。それゆえ黒的らを派遣して『通和』しようと思うから、この使者を日本へ案内し、東方を順化せしめよ。これは爾の責任として遂行すべきであり、風濤險阻であるとか、通好していないとかの言いのがれを認めない。」^②という内容の汗からの詔書を高麗王に渡した。また彼等は日本へ渡す詔書もたずさえていた。

そこで高麗王は十一月二十八日、樞密院副使宋君斐、侍御史金贊等を元朝の二名の使者の嚮導として遣わした。しかしながら使者は巨済島まで行って引き返した。つまり、第一回目の使者はその目的を果すことなく元朝に戻ったのである。^③フビライ汗の詔書に「勿^レ以^テ風濤險阻^ニ為^ル辭。」とあるにもかかわらず、対馬までわずかな距離しかない巨済島で引き返した理由は何か。我々はこれを推測によって知るほかはない。高麗国は三十年來の元との戦いにより国土は荒廢し、人心は不安定な状態にあり、自国の元朝属国化の過程を考える時、元朝が日本を属国化せんとすることは、元朝は勿論のこと高麗国にとって多大な犠牲を強いられることは自明のことであつたと思われる。当然平和交渉が不成立に終つた場合、従前の例として出兵、攻撃は避け得ず、その結果、兵器、兵士の面において高麗国が負担することによっておこる国内の荒廢は火を見るよりも明らかであろう。かかるとき高麗国としては、何とかして元朝に日本に対する関心を無くすよう様々な努力が為されるのも当然なことである。その第一の努力がうかがわれるのは「東国通鑑」に見える次のようなくだりである。

「伴^ヒ使臣^ヲ以往^ニ。至^リ巨済島^ニ。遙望^シ対馬島^ヲ。見^ル大洋万里^ニ。風濤颯^ル天^ヲ。意謂^フ危険若^ク此^ノ。安可^ク奉^ル上國使^ヲ。臣冒^シ險輕進^ス。雖^モ至^リ対馬島^ニ。彼俗頑獷無^ク禮義^ニ。設有^レ不^レ軌^ヲ。將如^ク之何^ヲ。」

このような報告は、しかしながらフビライ汗を納得させ得るものではなかった。汗は直ちに高麗の不誠実な態度を責めると共に、ふたたびさきの使者を高麗国に遣わし、今度は高麗国単独の責任において日本に詔書をもって行くこ

とを命じた。^④元朝の属国となつたいま世祖フビライ汗の詔は絶対不可避な命令として高麗王はこれを意に従つて実行するよりほかはなく、高麗国は潘阜を使者として我が国に向わせた。ここで注目しなくてはならないのは、その時潘阜の持参した元朝の詔書の日付が至元三年八月となつてゐることである。潘阜が太宰府に到着したのが至元五年正月となつてゐるところからこの詔書は第一回目に巨済島より、引き返した時に持参してゐた書状であつたものと思われらる。このことにより元朝がいかに日本の属国化の進展せざることに業を煮やし、高麗国の態度の敏速ならざるを不満としていたかといふことを知ると共に元朝の日本に対する評価の度合いをうかがい知ることができらる。ここにフビライ汗の詔書並に高麗国王からの書をあげ、高麗国の態度及び元朝の意図がどこにあつたかを検討してみたい。

2、国書の内容

〔蒙古国書〕

上天眷命

大家古国皇帝奉_二書

日本国王_二朕惟、自_レ古小国之君、

境土相接、尚_務講信修睦、况我

祖宗受_二天明命_一、奄_二有_レ区夏_一、遐方異

域、畏_レ威懷_レ德者、不可_二悉数_一、朕即

位之初、以高麗幸无_二之民_一、久瘁_二

鋒鏑一、即令罷兵、還其疆域、反其
旄倪、高麗君臣感戴來朝、義雖
君臣、而欲若父子、計
王之君臣亦已知之、高麗狀之
東藩也、日本密邇高麗、開國以
來亦時通中國、至於朕躬而無
一乘之使、以通和好、尚恐
王國知之未審、故特遣使、持書
布告朕志、冀自今以往、通問結
好、以相親睦、且聖人以四海為
家、不相通好、豈一家之理哉、至
用兵、夫孰所好
王其圖之、不宜

至元三年八月

日

〔高麗國王書〕

高麗國王王植、

右啓、季秋向レ闌、伏惟

大王殿下、起居万福、瞻企瞻、我國臣事

蒙古大朝、稟正朔、有レ年于茲矣、

皇帝仁明、以天下為一家、

視レ遠如レ邇、日月所レ照、咸仰其德化、今欲レ通好于貴國、而

詔寡人云、海東諸國、

日本与高麗為近隣、典章政理、有足レ嘉者、漢唐而下、

亦或通使中國、故遣書以往、勿以風濤險阻為辭、其

旨嚴切、茲不レ獲レ已、遣朝散大夫尚書禮部侍郎潘阜等、奉

皇帝書前去、且

貴國之通好中國、無代無之、況今

皇帝之欲レ通好

貴國者、非

利其貢獻、但以無外之名高於天下耳。若得

貴國之報音、則必

厚待レ之、其実与レ否、既通而後當レ可レ知矣、其

遣二介之使、以往觀レ之何如也、惟

貴国商酌焉、拜覆、

日本國王左右、

至元四年九月 日 啓

(南都東大寺尊勝院藏本)

このほか高麗国使、李仁挺、潘阜の手になる添書がある。^⑤

蒙古国書の内容についてその解釈に対立があるのでここに紹介してみたい。

ひとつはこの書が日本属国化を要求したものであるとし、もうひとつは日本を友邦として取り扱い、服従を要求したものでないとする。

まず前者については、高麗国を完全にその支配下に収めたフビライ汗はその余勢をかって日本に対し服属を要求してきたものであり、それは同じくフビライ汗が至元十年に緬国に宛てて出した国書にその内容が類似し、かつまたフビライ汗の要求を拒否した緬国の当時の王朝は蒙古軍の攻撃を受けてついには滅亡するに至ったという事実からも窺い知ることができる。そしてそれはまた蒙古国の他国隸属化政策における常套手段であり、初めに国書を遣わして国交を求め、次に返礼の使者派遣、返書を求めて属国の礼をつくすことを強要し、また貢物、人質などを要求して、ついには属国となし、その支配の下においてしまうという考え方である。

次にこの説に反対する考え方を紹介してみよう。それは比較的新しい解釈で、この書を文書形式より考察し、宋代の書簡の様式をみると、身分の高い者から低い者に対して書状を出す場合は、末尾に「不具」と書き、逆に下の者か

ら上の者に差し出す場合は「不備」と記す。また朋友の間では「不宣」と書く習慣があった。それ故この国書の場合にこれをあてはめてみるとこれは明らかに日本を友邦として取り扱っているのであって、決して服従を要求してきたものではないと主張する。

ではこの蒙古国書よりフビライ汗の意図がどのようなものであったかを知るにはどうしたらよいか。それには書面に表わされた言葉の検討はもとより、当時の蒙古国の状況、或は高麗国王の添状等の種々の面より考察して総合的に見地よりこれを判断しなくてはならない。

先ず国書は「相接する隣国どうしはお互いに仲良くすべきである。我が元朝の意に従っている国は数知れずあり、高麗もその例外ではない。然るに日本は高麗と国交があるにもかかわらず、我が元朝と国交をもっていない。昔より古人も『四海を以て家と為す』と言っているように是非通好したいから国交を樹立すべく努力するように。」といった内容からして表面上は穏やかな調子で友好関係樹立を求めているが、暗黙のうちにはあるが処々に「……畏威懐徳者、不可悉数。」と言ひ、「……以高麗无辜之民、久瘁鋒鏑。」と言つて我が日本が蒙古国に対し礼をとるべきことを望み、高麗と同様な地位に置かしめんとしたのではないだろうか。たしかに「不宣」の文字より判断するならば対等な関係を求めて来たものと受けとることもできるが、「……至用、夫孰所好、」のくだりは、そこに穏やかならざる威嚇を感じざるを得ないのである。友邦関係を求める者がこのような言葉を使用するだろうか。これは結果論になつてしまふが、文永、弘安の両役を考えると、この国書が単なる和平交渉提案であつたとする考え方には賛成し兼ねるのである。

3、高麗国王の書

さてこのような意味あいをもつ蒙古国書をもって日本に渡米した高麗国の使者潘阜は別に高麗国王の添書を持って来た。前項にその本文をあげたが、ここでは高麗国王が何故添書をよこしたか、その内容はどのようなものであったか。そしてその添書によって何を期待していたかを考えてみたい。

先ず気づくことは、この書が蒙古国書と較べて全くへりくだった心でもって書かれているということである。これは我が国がそれまで朝鮮半島に与えてきた影響力或は遣唐使以来非公式な貿易が盛んに行われてきた我が国の事情を知っている高麗国にとっては日本国が少なくとも高麗国よりも強大な勢力を持っている国家であると感じていたことは当然なことであろう。

また蒙古国書には大国意識というものはつきりとうかがえる。それは文中、「大蒙古国皇帝、」及び「祖宗……」の文字の配置をみた場合いづれも他の文句より一段上に書かれていることである。これを高麗国王の書にみた場合、「大王殿下……」、「日本……」、「貴国……」と、我が国に対する言葉がいづれも必ず文章の上段に配置されている。これは高麗国王が心から我が国に対して礼をつくしていたことを示すものであろう。

更に高麗王の書状を読むとき、この書状には自国の疲弊を、人心の荒廃をおもんぼかる高麗国王のひとかたならぬ懇願がにじみでていることがひしひしと感ぜられる。フビライ汗の大望を事前に断念させることに失敗した高麗国王としては、この度の遣使に対し、日本国と蒙古国との友好関係樹立を平和裏に成功させようと腐心していたに相違ない。三十年にも及ぶ蒙古国との戦いは高麗国民にとって耐えがたき苦痛であり、更に日本と元朝との交渉が不成立に終わった場合、フビライ汗としては自己の意思をあくまでも通すべく、武力にうったえてでも日本の服属を進めることは、高麗国自身の体験からも、また蒙古国の従来版図拡大政策からも容易に知ることがができる。武力攻撃となった

ら膨大な戦争準備費の負担は目に見え、へたをすると高麗国滅亡までに追い込まれることになりかねない。

4、蒙古国書に対する幕府の態度

高麗国の使者潘阜の持参した如上の書状は、太宰府より幕府に渡され、更に朝廷にもたらされた。表面上は我が国との友好関係樹立を望み、対等の立場で親睦せんことを求めてきた蒙古国の書状であったが、その中に書かれている「……小国之君……用兵、夫孰所好……」の文句は我が国を小国あつかいせんばかりの口調で、その朝貢を強要するに兵力を以て行わんとする意図を幕府に感ぜしめた。これについては、「文永五年閏年正月八日、蒙古国の賊徒、日本を責むべしと云云、之に依りて高麗より牒状あり云云。」とする文章が大外記中原師茂の注進せる勘例に見え、また「正月、蒙古、高麗の牒状到来す、高麗の牒使潘阜來す、日本蒙古に服従すべきの山之を載す云云」と関東評定伝の文永五年の条に伝えられ、更に「異国賊徒可来我朝山風聞。」と深心院関白記に記されている。これらの記述はおそらく幕府、朝廷の考えでもあったと見てさしつかえなからう。ある者は蒙古国を賊徒と程し、またある者は日本に服従すべきと言って来たと言っているところからこの事件が異国（蒙古国）侵略の前ぶれと看做されたと考える。

その結果幕府のとった態度はあくまでも蒙古国との通好を拒むということであった。「蒙古人挿凶心。可伺本朝之由。近日所進牒使也。早可令用心之旨。可被相触讀岐国御家人等状。依仰執達如件。文永五年二月廿七日。相模守、左京権大夫駿河守殿」（新式目）これは幕府の考えを如実に語っている。また八幡愚童記等には、幕府が神社、寺院に異国降伏の祈禱を命じている文章が処々に見えている。これらの様子からすると我が国には蒙古国の攻撃を避けようとする意思は見られず、むしろこれを向い撃つべく太宰府を中心とその準備を進めた。

さて、このような我が国の動きの中で高麗国使者潘阜等は太宰府で幕府からの返牒を待っていたが、いっこうに返

牒を得ることはできず、結局要領を得ないままむなしく帰国の途についた。^⑥

5、文永の役まで

高麗国の使者潘阜等の報告によって彼等がその使命を果すことなく帰国したことを知ったフビライ汗は、前例もあることであるし、直接自国の使者を派遣して事の真相を知るべく、その年の九月黒的、殷弘を蒙古国国使として任命した。日本に対して返牒督促の使者が派遣されるかわら、高麗王王植は兵を一万、船艦を一千艘用意したことを蒙古国に報告している。

高麗王は潘阜等が使命を果せなかったことに対する蒙古国の処置を恐れてかこのような軍備の提供を申し出たものと思われる。

蒙古国の使者は高麗国より申思倭、陳子厚、潘阜を嚮導としてみたび我が国の返牒を得べく日本に向った。

しかしいかなる不都合な事態が発生したかは明かではないが、結局この使者も所期の目的を達することはできず、対馬より原地人を捕虜として本国に引き返さざるを得なかった。^⑦島民を捕虜として元朝に連れて帰った使者の真意は明かでないが、ここでは捕虜より日本の様子を聞きだし、我が国の本意を知ろうとしたこと、また当該捕虜を使って日本接近を図ったのではないだろうかということが推測できる。

さて、文永六年の七月の下旬、蒙古国より高麗国に使者が発ち、さきに捕虜として連れていった対馬島民を送り返しながら、蒙古国国中書省の牒状を日本に伝達するようにとのフビライ汗の命令を高麗王に伝えた。そこで高麗王は金有成、高柔を日本に遣わした。ここに至っていままでの状況と少しく異なることは此度は朝廷が元朝に対し返牒を遣わさんとして返牒の案文を作成させたことである。^⑧しかし幕府はこの返牒案を抑えて渡さず、結局使者はむなしく

帰國せざるを得なかつた。その後も蒙古国からは使者が度々發ち、他方高麗国に命じて日本遠征の準備を着々と進めていった。数度の遣使にもかかわらず、わが国はかたくなに返牒を拒み、あくまでも蒙古国と戦うべく、太宰府に対し対蒙古軍に備えて兵士、軍備の強化を命じ、また全国の神社、寺院に対しては蒙古国の襲来に備え敵国降伏の祈禱を行わさしめる通達を出している。ここで我々が考えさせられることは、なにゆえに我が国がこのようにかたくなに蒙古国との国交樹立を拒んだかということである。

これには先ず従来他国よりの侵略を経験したこともなく、かつ蒙古国の実情を間接的にしか知り得ない状況のもとでは、このように唐突で一方的な通好要求は恐らく幕府の予期せぬものであり、また非公式ながらも高麗国、或は南宋との交易によって得た蒙古国についての情報はいわゆる被侵略者からのそれであり、そのことはわが国の態度をよけいに自閉的に硬化せしめたのである。

もうひとつ我々が見逃してはならないのは、当時の我が国において異国侵略の危機説が語られ、幕府の首脳者の間に潜在的に或は顕在的にこのような危機感と防衛意識があつたのではないかということである。この考え方の根拠として私はここで蒙古襲来予言の書としてあまりにも有名な日蓮聖人の「立正安論」の存在をあげてみたい。

6、蒙古襲来の予告

「立正安論」は一二六〇（文応元）年、およそいまから七百年の昔、日蓮聖人三十九歳の時に著わされた書で、「開目鈔」、「観心本尊鈔」と共に日蓮聖人の代表的な著作とされている。そしてこれは歴史上蒙古襲来を予言した書として広く知られるものであるが、これは後世の人々の誤解に基くものであって、この書が外敵侵入を予言すべくして書かれたものでないこと、またかつて言われた国家主義鼓吹の書でもないことは実際に内容に触れてみればわか

ることである。

日蓮聖人は、当時の社会における様々な災難―地震、飢饉、疫病等―の興起はすべて世間の人々が皆正法に背き、邪法に帰依しているがためである。かかる邪法への帰依を止め正法に帰依することが災難をのがれる方法であると主張、他宗なかんづく法然浄土教への非難をもって仏教界に登場した。

この「立正安国論」は時の得宗北条時頼に献上すべく宿屋光則に依頼された。しかしながらこの書に對する時頼からの反応はなく、結局のところ表面的には「立正安国論」献上と云うかたちで行った国家諫曉は失敗に終わった。けれども時頼をはじめとする幕府首脳者に与えた心理的影響がかなり大きかったであろうということは、この諫曉を契機として松葉ヶ谷焼打事件がおこり、ついには日蓮聖人の伊豆流罪という一大事からもうかがわれる。

「立正安国論」献上から八年、蒙古国書が我が国にもたらされた時、日蓮聖人のいわゆる他国侵逼難がついに現実となって現われたという意識が当時の人々にあったのではないか。ここに幕府のとったかたくなな態度の一根拠があると考えられるのである。

7、文 永 の 役

文永五年正月に初めて蒙古国書が我が国にもたらされてより六年、フビライ汗の和平的友好関係樹立の願いもむなく、元朝はついに武力による日本属国化政策に踏み切り、文永十一年、兵力三万人より成る日本遠征東軍は九百艘の兵船に乗り、朝鮮半島の合浦より出航、先ず対馬を侵略し、地頭の宗助国を討死させ、次いで壹岐を攻めて守護代の平景隆の軍を粉碎し、十月九日いよいよ博多湾頭にその全容を現わしたのである。

博多湾より九州に上陸した蒙古軍は、ジンギス汗以来約一世紀に亘るアジア大陸侵略の経験による百戦練磨の戦略

と進歩した兵器を自由自在に駆使して幕府軍に迫り、これを苦戦に陥入れた。モンゴルの一部族から勃興し、アジア大陸の殆んどをその手中に収め、ヨーロッパにまでその名を轟かせた蒙古軍であつてみれば我が国との戦いなど別に苦戦するほどのこともなかつた。

それに較べて我が国は武器においても、戦略においてもその比ではなく、いわゆる武士の兵法なるものは勇猛果敢な蒙古軍には通じる戦法ではなく、たちまちのうちに苦戦に追いこまれてしまった。そしてこのままいけば我が軍が負けるであろうことは目にみえていた。しかしながらここに蒙古軍の予期しない出来事が起つたのである。

いかに強力な陣容を誇る蒙古軍といえども自然の力の前にはどうするすべもなく、折から九州地方を襲つた暴風雨のために船団の殆んどが壊滅するという事態が生じてしまった。

このような結果はフビライ汗にとって全くもつて無念なことであり、彼の落胆せる有様はひととおりではなく、それだけに以前にもまして日本侵略の意気は盛んなものとなつた。しかるに今度の戦いの高麗國に与えた打撃ははかりしれず、遠征準備に際し、フビライ汗の命令のもとにおそらく全国力を投じて九百艘からの船を造り、兵士、人夫等に費やした犠牲は多大なものであつただけにこのような意外な結果に終つたことは、國家の存命、國民生活、經濟、政治にかかわる重大な問題を今後に残すこととなつた。

しかしながらこのたびの惨敗は、戦いにおいて敗れたのではなく、いわば偶然ともいふべき暴風雨に敗れたこと、蒙古國の大國としての面子、フビライ汗の征服欲、これらの諸要素は決してフビライ汗に日本遠征計画を断念させなかつた。そして翌一二七五（文永十二）年、彼はあらためて我が國に対し杜世忠らの一行を日本宣諭使として派遣すると同時にまたもや高麗國に対して造船を命じたのである。

8、日本遠征の中断

他方、中國の殘存勢力である南宋の攻撃を同時に行っていた蒙古國は、最後の抵抗を示す南宋を全滅すべく日本遠征を一時中断したようである。

ここで我々は元朝の日本遠征中断の理由として次のふたつを考えなくてはならない。ひとつは前述の南宋攻撃である。一二六八年以來南宋最大の堅壁を誇る襄陽城を陥落させるべく全軍をこの地に投入し、ついに一二七二年これを落し、一二七四年揚子江上で大会戦を展開し、敗走する南宋軍を攻め、一二七九年完全に南宋軍を殲滅させることに成功した。

もうひとつの理由は、高麗朝の事情である。第一回目の遠征（文永の役）のために約三年の準備期間を要したことを考えると、たとえフビライ汗にその気があったとしても、遠征の負担を殆んど高麗國にかけている以上、第一回遠征失敗後直ちに次回遠征を強行するだけの準備の可能性がなかったことも見逃しにはできない。また第一回遠征失敗の敗因が戦鬪にあらず、暴風雨という天災にあったことも原因して、遠征計画に対し綿密な程の計画をたてたとしても不思議ではない。このことはフビライ汗が日本遠征の任にあたらせるため新たに征東行省を設置したことをみても肯ずける。また高麗國にしても九百艘からの造船は並たいていのことではなく、やはりそれ相当の時間をかけなくては次の遠征に備えることができない。

さて文永の役後の我が國の態度はどうかというと、西國の警備体制の強化は勿論のこと御家人に対し石塁の築造を命じ、神社、寺院に異國降伏の祈禱をさせている。また特筆すべきは異國征伐の準備が九州諸國及び安芸國の御家人に申し付けられたことである。結局異國征伐は実施されることなく終ったが、對蒙古國に対し受身的な戦いから攻撃

的な戦いに転じようとする幕府の積極的な態度がうかがえる。

9、弘安の役

さて南宋朝の滅亡（一二七九年）によりフビライ汗の目はふたたび日本遠征に向けられ、一二八一（弘安四）年遂に對日本遠征が命ぜられ前回の規模と比較にならぬ程の軍隊が準備された。兵力十四万人と数にして七倍、また兵船にしても四千四百艘と五倍近い数が用意されたことは南宋の敗戦もさることながらフビライ汗の日本属国化に対する執念、前回の敗退における權威失墜回復の願いがいかに強かったかということ物語っている。そしていよいよその年の五月蒙古軍は従来の合浦港よりの東路軍に加え慶元からの江南軍のふたてに分れて日本侵略の途に就いた。^⑩

10、蒙古軍の敗退

このようなフビライ汗の大望を乗せた大船団が日本に向った。しかし前回とは異なり、日本側の抵抗も激しく従って戦鬪も一進一退の有様であった。いかなる理由があったかは解らないが蒙古軍は大攻勢に出る様子はなく、そうこうしているうちにまたまた暴風雨がこの大船団を襲い大部分が波にのまれ、潰滅的な大惨事となってしまった。その結果今回の日本遠征も完全な失敗に終わったのである。^⑪

その後も幾度か日本遠征の計画は立てられたようであるが、インドシナ半島における交趾及び占城国の背叛、オゴタイ汗國の反乱等のために事は思うように進まず、さすがのフビライ汗もこの計画を断念せざるを得ず、これに加え、造船、人夫供給に多大な犠牲を払い今や人心共に疲弊しきった高麗、江南両地では、もはやこれ以上の負担が不可能に近いものであったことは想像にかたくない。そして最も肝心な日本遠征計画の中止理由は、この計画の発案者であり推進者であったところのフビライ汗の死であった。何故なら彼の死後日本遠征の計画は再び日のめを見なかっ

たのである。

11、蒙古軍の東南アジア侵攻

アジア大陸全土征服の野望をもつ元朝は、また東南アジア方面へもその食指を伸ばし、南宋朝滅亡を手がかりとしてその勢力をインドシナ半島、緬国或はジャワ島に向って行った。しかしながら交趾国、占城国、緬国に対しての攻撃は徹底せず、完全支配するまでには至らず、殊にジャワ遠征に至っては完全な失敗に終わったのである。

12、元朝の日本遠征失敗

ここで我々は、かくも強大な勢力を誇る蒙古国が、何故に微少勢力たる我が国の侵略に失敗したかということをしよく考えてみることにする。このことはとりもなおさず元寇を考える上で最も重大な点となろう。

第一の原因として考えなくてはならないのは、元朝が遊牧民族出身であったということである。前述したようにモンゴル族の国家的抬頭をジンギス汗にみると、ステップの民としての遊牧民族は、他の諸民族である森の民、農耕の民を攻略するにあたっては、敏速な騎馬戦法により、また日常生活に基づく敏速な移動性、果敢なる機動力によって思うがままの戦闘を繰り上げることができたであろう。しかるにこの騎馬戦法は、日本という小さな島国において生かされることは不可能であるのみならず、多分かれらにとつては不得手であるところの船をあやつる戦いは、一層かれらの戦力に阻礙を来したであろうことは想像にかたくない。つまり陸上に強固な陣營をかまえて行う地上戦ならともかく、本拠を不安定な海上におかなければならなかったところにその敗因の一端を見るのである。

第二に考えられるのは、軍団についてである。第一回の文永の役の場合には九百艘の船に三万人の軍隊、また第二回目の弘安の役にいたっては四千四百艘の船に兵力十四万人と、とてつもない大兵団であつて、小さな日本列島、とり

わけ九州を攻撃するにはあまりにも大きすぎる勢力ではなかっただろうか。このことは占城攻撃に二百艘の船と一万五千人の兵を用い、交趾攻撃に五百艘の船と九万一千人の兵を用い、或はジャワ遠征に兵力二万人、船舶一千艘を用いたことを考えてみても日本遠征に使った軍団がいかに大がかりなものであったかはわかるであろう。そしてこの大船団があつた博多湾附近に浮ぶさまは異様な光景であつたろう。我が軍の戦闘意欲を喪失させるに充分すぎる程の数であると同時に海上戦に慣れぬ元軍にとつて予期せぬ落し穴があつたのである。それは一朝事が起つた場合これだけの数の船と兵士をどのように指揮するかということである。恐らくこの点での失敗が元軍敗退の主要原因ではなかつたかと考える。

第三の原因としてあげたいのは交戦期間である。従来の侵略にあつては、元軍は一、二年はおろか十年以上もかけて敵の勢力を敗退に追いこむのが常であつた。しかるに、日本攻撃にあつては短期日のうちに敗退してしまい、全勢力を投入しないうちに暴風雨にあつたのである。これは戦術の上で重大な誤りがあつたのではないだろうか。もし仮りに元軍が九州に全軍上陸して駐留してじっくりと戦いを展開したならば恐らくや日本列島も元朝支配に服さざるを得なかつたであろう。

第四の原因としては船舶の問題がある。四千四百艘もの船舶をかなりの短期間に造ることは材料の面からみても或は造船技術、構造上から考えても無理があつたと考えるのが妥当であろう。航海は勿論のこと暴風雨に充分耐え得るだけの堅固な船舶であつたかどうかが問題となる。さらに航海技術等のあやまりのあつたことも考えてみなくてはならない。つまり狭い海上に合理的に船を停泊させておくことは技術的に高いものを要求したであろうということである。この点に関する資料がないので想像の域をでないのであるが、少なくとも暴風雨によつて殆んど船舶が壊滅し

たという事実はこのことを如実に物語っている。

第五の原因としては軍の構成がある。これは第二の原因とも関連することであるが、元軍といっても実質的に元朝の軍隊は少なく、その殆んどが、第一回の文永の役の場合は高麗軍であり、第二回の弘安の役の場合は高麗軍と江南軍の混成軍であったということである。元朝によって力で支配されている高麗国、江南が、真に元朝の軍隊としての自覚をもって日本侵略に参加したかどうかということ、このような混成軍が非常時にどれほどの秩序をもって元軍の指揮に従ったかということを考えるときこれも見逃すことのできない敗退原因となるであろう。

最後に、そして最も直接的な原因にあげるべきものに暴風雨がある。日本遠征の時期が文永の役の場合には九月、弘安の役が六月下旬であったことは潮の流れ、風の向きからして航海に都合のよい季節であったものの伏兵ともいべき暴風雨は元軍の計算にはなかったであろう。少なくとも文永の役においては暴風雨を予測していなかった。この時の暴風雨が台風によるものであったかどうかは明らかではないがこのような思わぬ事態は元軍にとって意外なことであつたらう。

以上文永の役、弘安の役を通して元軍敗退の原因と思われるものをあげて検討してきたのであるが、結局直接原因としての「暴風雨」を軸として如上の諸原因が作用し合つて偶然的な諸因と必然的な諸因とによって船舶の壊滅をまねいたものである。

13、文永の役、弘安の役の水路について

ここで元軍の水路を検討して別の面から元寇というものを考えてみたい。

我が国の列島、大陸との交渉の歴史は古く、歴史上有名なものとしては卑弥呼の魏国との交渉、「親魏倭王」の称

号を受けた事実がある。また三六九年には加羅に日本府任那を置いて半島攻略を行い、一時的にせよ日本による支配が為された。更にくだって聖徳太子親政の時代に入ると積極的態度にいでて、五九七年の新羅遣使、六〇〇年の新羅征討軍及び遣隋使派遣、なかんづく六〇七年の小野妹子を遣隋使として隋国王に国書を遣わしたことは有名である。

さてこのような、大陸との交渉における交通機関としての船舶の役割は極めて重大で、鑑真などのように何度も渡航に失敗し、ようやく日本にたどりつくという例は稀ではなかった。当時遣隋使、遣唐使等が利用した航路としては次の三つが知られている。すなわち古く遣隋使時代より使われていた北路、さらに遣唐使中期より開かれた南島路及び末期に入つてとられるようになった南路がこれである。

(1)、北路(新羅道)

六〇七年に遣隋使として渡隋した小野妹子に同伴して来日した裴世清の報告したところによるとみられている『隋書』の倭人伝には、裴世清の通った航路が「百濟に渡り、竹島に至る。南に至れば舳羅国(濟州島)を望む。都斯麻国(対馬)を経、大海中に在り、又東一支国(壹岐)に至る。又竹斯国(筑紫)に至る。」と記されている。当時の航路としては朝鮮半島を起点として対馬、壹岐の両島を経て博多湾に至る航路が潮流、季節風との関係から考えて最も利用し易い航路であつたようである。

(2)、南島路

七五三年に帰朝した第十次遣唐使は十一月に唐の蘇州黄漁浦を出帆し、南島をとり、先ず阿児奈波島(沖繩島)に着き、多禰(種子島)を経て益救島(屋久島)から、更に薩摩国阿多郡秋妻屋浦に着いた。この時には帰朝遣唐使と共に鑑真が来朝している。この南島路が利用されるようになったのは半島における新羅勢力の増大に伴う我が国との

関係悪化によるものであった。つまり北路を利用することはかなりの危険が伴ったからやむをえず島々を経て航海する南島路が開発されたのである。

(3)、南 路

これは揚子江口地域の港の楚州、揚州、明州等の港より出帆し、値嘉島（平戸、五島列島）を直指して一直線に東支那海を横断するもので日数短縮の意味で開発されたものである。つまり北路、南島路をとった場合約一ヶ月余りの日数を要する。これは途中の島々にたち寄るため、あるいは廻り道をするためである。しかるにこの南路をとった場合十日に充たない日数で渡海することができるのである。これは長い間の遣隋、遣唐使の往来によって経験を積むと同時に造船技術、航海技術が著しく発達したことを意味している。

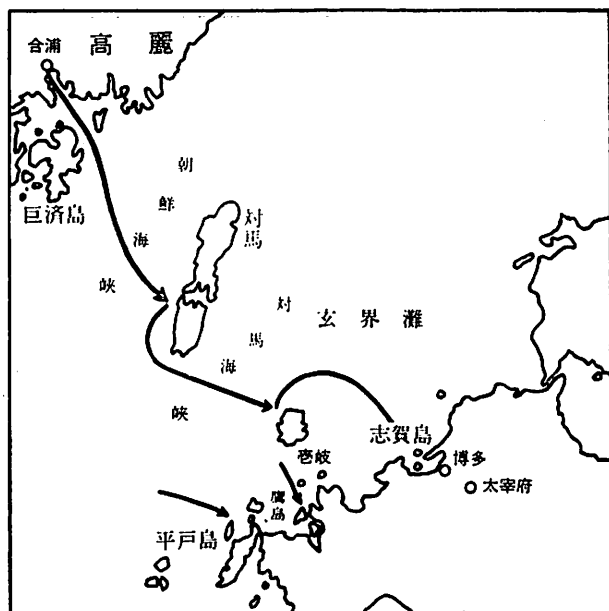
以上のコース以外に海道舟航路、渤海路等があるがここでは省略する。

さて、航路を考える上に欠くことのできない要素に季節風がある。元軍の日本遠征においても遠征時期がかなりの重要な要素となっていたのでここで季節風について述べておく。

台湾・琉球南部は陰曆四、五月より七、八月にかけては南西風、また八、九月より翌年の二、三月にかけては北東風が吹く。日本、揚子江では前期には南東風が、後期には北西風が吹き、前者は五月頃、後者は十月頃が最高潮となる。これは航海にとつては非常に重要な問題である。つまり大陸より日本に渡る場合は七月が最も航海に適した時期なのである。しかも季節風の変わり目が近づいた頃に日本や揚子江を吹き渡っている南東風を利用しているケースが多く見られる。

14、文永の役の航路

元・高麗兩軍は十月三日合浦を出発し、同五日に対馬島佐須浦に着き、地頭宗助國との間に激戦を交え、この結果地頭助國をはじめとして多数の死者をだした。ついで軍団は十四日には志岐島をおそい漸次南下して肥前の平戸、能古、鷹島等の島々を襲い、ついに十九日筑前今津に侵入、いよいよ博多湾上に大小九百艘という大船隊を現わすこととなった。

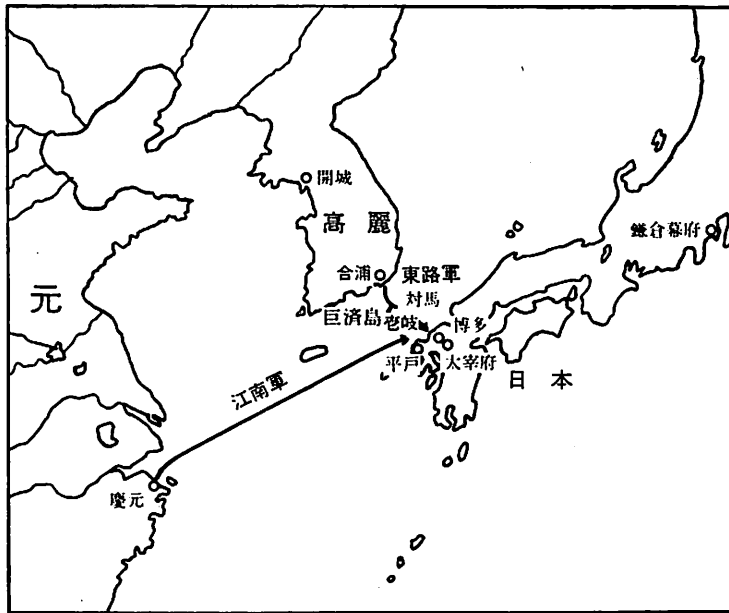


これは前記の北路にあたるもので高麗に全面的な造船を命じた経過からしてもこの航路をとるのが自然である

15、弘安の役の航路

今度の出航は東路軍が前回と同様朝鮮半島の合浦より江南軍が慶元より行われた。これよりさき、東路軍と江南軍は最初の予定として志岐島にておち会い合同して日本攻撃に對することになっていた。しかるに諸般の事情により江南軍は直接我が九州の平戸に向けて出帆したのである。また江南軍は先發隊として三百艘の船が分派され、東路軍に合流すべく最初の目的地志岐島に向い、いわゆる志岐島の合戦が行われることになるのである。

前回の暴風雨による敗退の苦い経験を考慮して今回は五月初旬に出帆が行われたにもかかわらず結局全勢力が揃



ったのが六月下旬となり、またもや悲劇を繰り返へ
すことになるのである。

むすび

元朝の日本遠征は結局失敗に終わった。しかし、い
わゆる元寇は我が国に様々な影響を与えた。軍事面
におけるものとしては異国警固番役の設置、異国要
害石築地の築造は後々までも続けられた。しかし政
治面、経済面、社会面としては合戦における恩賞問
題は鎌倉幕府崩壊の要因として内面的に作用してい
った。

また元寇の日蓮聖人に与えた影響は計り知れず、
予言者としての確信、また宗教者としての信仰の確
立がこの事件を契機として行われていった。実に日
蓮聖人を語るとき元寇は不可欠の事件として登場し
てくるのである。

【註】

- ① ……少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。……(開目鈔五七七)
 - ② 至元三年二月。立藩州。以処高麗降氏。帝欲通好日本。……(元史高麗伝)
至元三年八月丁卯。命兵部侍郎黑的。……(元史日本伝)
順孝王七年十一月癸丑。蒙古遣黑的、股弘等来。詔曰、今爾國人趙孿来日……(東國通鑑)
 - ③ ……高麗國王王禎以帝命。遣其枢密院副使宋君斐。偕礼部侍郎金贊等。導詔使黑的等往日本。不至而還。(元史日本伝)
……宋君斐、金贊与黑的等。至巨濟島松辺浦。……畏風濤之險遂還。……(東國通鑑)
 - ④ 至元四年六月乙酉。黑的、股弘以高麗使者宋君斐、金贊不能導達至日本来奏。降詔資高麗王王禎。仍令其遣官至彼宣布。以必得要領為期。(元史日本伝)
 - ⑤ 又遣起居舍人潘阜偕行。上書曰。向詔臣。以宜諭日本。臣即差陪臣潘阜。奉皇帝親書。并賚臣書及國驛。往諭其國。使不納王都。留置西偏太宰府者凡五月。館待甚薄。授以詔旨。而無報章。又贈國驛。多方告諭。竟不聽。逼而送之。以故不得要領而還。未副聖慮。愾懼更深。(東國通鑑)
 - ⑥ 至元五年七月丙子。高麗國王王禎。遣其臣崔東秀来言。備兵一万。造船千隻。詔遣都統領脫朵兒往閱之。就相視黑山日本道路。仍命就羅。別造船百艘。以伺調用。(元史世祖本紀)
 - ⑦ 順孝王十年三月。黑的及申思侏等至对馬島。執倭二人以還。四月遣參知政事申思侏。偕黑的的。以倭二人如蒙古。(東國通鑑)
 - ⑧ 贈蒙古國中書省牒。嘗長成。日本國太政官牒。蒙古國中書省。附高麗國使人牒送。牒。得大宰府去年九月二十四日解狀。去十七日申時。異國船一艘。来着对馬島伊奈浦。依例令存問来由之処。高麗國使人参来也。仍相副彼國並蒙古國牒。言上如件者。就解狀案事情。蒙古之号。于今未聞。尺素無胥初来。寸丹非面僅察。原漢唐以降之蹤。觀使介往還之道。緬依内外典籍之通義。雖成風俗融化之好礼。外交中絶。嚮還翰輻。夢傳鄉信。忽謂隣陸。当斯節次。不得根究。然而皇上之命。緣底不容。音問縱雲霧萬里之西巡。心復忘胡越一體之前言。抑貴國會無人物之通。本朝何有好惡之便。不願由緒。欲用凶器。和風再報。疑冰猶厚。聖人之齊。釈氏之教。以濟生為深懷。以奪命為累業。称何帝德仁義之境。選開民庶殺傷之源乎。凡自天照皇大神臨天統。至日本今皇帝受日嗣。聖明所覃莫不属左廟右殿之益。得一無二之盟。百王之鎮護孔昭。四夷之脩睦無紊。故以皇土。永号神國。非可以知競。非可以力爭。難以一二乞也。思量。左大臣宣奉敕。彼到着之使。定留于对馬島。此丹膏之信。宜伝自高麗國者。今以狀牒到。准牒故牒。文永七年正月 日
- 贈高麗國牒。日本國太宰府守護所牒。高麗國慶安尚晋安東道按察使来牒事。牒。尋彼按察使牒。併当使謹牒。着当府守護所。

就來牒。凌萬里路。先訪柳營之軍令。達九重城。被降芝泥之盟旨。以此去月太政官之牒。宜伝蒙古中書省之衙。所偕返之男子等。艦護送之舟。令至父母之鄉。共有胡馬嘶北。越鳥翫南之心。知盟約之不空。感仁義之云露。前頃牒使到著之時。警固之虎卒不來。海浜之漁者先集。以凡外之心。成慮外之煩賦。就有滯聞。恥背前好。早加霜刑。宜為後戒。殊察行李淹留之艱難。聊致旅糧些少之資養。今以狀牒到。准牒故牒。文永七年二月 日。

⑨ さるほとに夜も明ぬれば。廿一日なり。あしたに松原を見れば。さはかり屯せし敵もをらす。海のおもてを見わたすに。きのふの夕へきて所せきし賊船一艘もなし。……(八幡愚童記)

……会夜大風雨。戦艦触崖多敗。金洗墮水死。(東園通鑑)

⑩ 至元十八年正月。命日本行省右丞相阿剌罕、右丞范文虎、及忻都、洪茶丘等。率十万人征日本。(元史日本伝)

⑪ ……既而文虎以戰艦三千五百艘、蛮軍十余万至。適值大風。蛮軍皆溺死。……(東園通鑑)

参考文献

日本と世界の歴史(十卷)	学習研究社
アジア歴史大系(九卷)	平凡社
世界歴史(九卷)	岩波書店
世界歴史シリーズ(モンゴル帝國)	世界文化社
物語元寇史	田中政喜著
蒙古襲来	襲 肅著
蒙古襲来の研究	相田二郎著
世界史大系(八卷)	誠文堂新光社
日本の歴史(四卷)	読売新聞社
日逆	大野連之助著
日本の歴史(八卷)	中央公論社
世界の歴史(六卷)	中央公論社
日本仏教史(三卷)	辻 善之助著
日蓮聖人御遺文講義(一巻)	鈴木一成著
昭和定本遺文	山田安栄著
伏敵篇	